

我らタタキ体験隊

～佐賀町のカツオと人にふれあってみませんか 漁協女性部の新たなる挑戦～

佐賀町漁業協同組合女性部
黒潮カツオ体験隊 代表 明神 多紀子

1. 地域の概要

私達の住む佐賀町は、高知市より西へ約100km、高知県の西南地域に位置し、足摺岬や四万十川にも近く温暖な気候、豊かな自然に恵まれた人口4,200人程の小さな町である。(図1)

主要産業はカツオ漁を主体とする漁業である。シメジやエリンギなどのキノコ栽培も盛んであり、特産品として風と太陽で育てた完全天日塩も作られている。(図2)

2. 漁業の概要

平成16年現在の組合員数は356名で、カツオ一本釣を主体とする大型カツオ船や19トン型カツオ船33隻を含む356隻を有し、釣、定置、磯建網等の漁業が盛んである。

3. 研究グループの組織と運営

佐賀町漁協女性部は、昭和28年に発足し、現在の部員数は205名である。4地区から選任された15名の地区役員と5名の執行部役員により構成される。

主な活動としてはカツオに代表される魚食普及活動、また環境美化活動としては年3回の浜清掃をはじめとするEM菌の活用と使用の推進。貯金、共済の推進運動や年金友の会の開催等、漁協への協力があげられる。

4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

今までにも私達は、活動の柱である魚食普及活動として要請があればカツオ料理の指導講習をしてきた。そうして今、最も力を入れて取組んでいるのが今回お話をすることとなった「カツオのタタキづくり体験事業」である。

私達が事業として取組むこととなったのは私が平成12年度高知県の県民参加の予算づくりのモデル事業に提案し、そして採択されたことである。

佐賀町は漁業中心の町なので、漁業者の所得が町の経済動向に大きく影響すると言っても過言ではない。近年の魚価安、漁獲量の減少また船員不足や漁業者の高齢化といった問題もあった。アンケートによると漁業者の80%が息子を漁師にしたくないといった結果もある。その中で少しでも漁業者の生活が豊かになることを願ってきた。「美しい自然」「鮮度抜群の日戻りカツオ」「美味しいキノコ類」「親切で優しく温かい人々」こうした恵まれた地域資源を生かして何か自分たちでできることはないかと地域で話し合う。町に訪れてもらい県内外の人々と交流を図ることで地元の人々も町も元気になりたいという熱い思いからの立ち上げであった。

5. 研究・実践活動の状況及び成果

平成12年、漁協女性部を中心に町の観光協会、商工会、行政の方々そして漁協の組合長や職員の方にも参加していただき話し合いを進める。

こうして漁協女性部員や地元の各組織の代表者13名で「黒潮カツオ体験隊実行委員会」を結成することとなる。先進地の視察等、1年間の検討を重ねて準備を進める。まず最初、11月に観光業者やホテルの関係者を対象にモニターツアーを開催、佐賀町を訪れてもらいタタキ体験をしていただく。とは言っても体験場の設備も何もなく漁協の広場にテントを張っての体験である。食事は漁民センターを借りてのことであった。50名のモニターの方々の好評をいただくと共に「商品」となり得ることの確認を受け、本格的に事業として取り組むこととなる。

その翌年から大人数の修学旅行生や一般の受入が始まる。平成13年度487人。14年度は体験場所に旧市場を借り、雨天対策も解消して800人。15年度は1,687人の受入をする。受入れの度に、自宅の倉庫から必要な道具や物を持ち出し、終わればまた持ち帰るといった繰り返しであった。衛生面やトイレなどの設備不足も大きな課題であった。この3年間、資金的援助は一切受けずに自分達での自主運営であった。忙しさに追われあっという間の3年間であった。私達は、カツオの捌き方はとても簡単だと思っていたが、人様に教えるとなると大変な事である。何とか無事に捌き終わり、わらで焼いて出来上がるとほっとしたことである。初めての修学旅行生は136名を受入れ。無事終えた時は協力いただいた漁師さん、行政や観光協会の方、その他大勢の方々に感謝するとともに官民一体となった人々の力の結集こそが事業の発展の大きな源であることを実感した。

そんな苦勞の甲斐もあり、女性部の体験事業が認められることとなる。念願のタタキづくり体験等交流施設「カツオふれあいセンター黒潮一番館」として佐賀町により建設されることとなったのである。平成15年10月29日に落成の運びとなった。これで天候を気にせず、また衛生面やトイレの設備を心配することなく体験事業ができることとなった。行政をはじめ関係者各位の温かいご支援の賜と感謝するところである。

今年度、平成16年度の体験者数は2,097人。今では一度に250名の修学旅行生の受入も難なくこなせるようになってきた。列を連ねてやってくる観光バスを50名ほどのスタッフが一列になって出迎える。身の引き締まる瞬間だ。と、共に「ようこそ、佐賀町へ」と、感謝の気持ちが溢れ出る。それに応えるスタッフのチームワークの良さは抜群であると自負している。この事業を維持できるのは「新鮮なカツオ」はもちろんのこと「地元の温かい人達とのふれあい」そして「もてなしの心」が大きな魅力となっている。都市と漁村との交流である。

6. 波及効果

体験施設の完成により、大型観光バスが町に乗り入れてくるようになった。バスツアーやマイカーでの訪問者も増えた。また、この施設の利用法として平成16年1月5日より喫茶部をオープンさせることとなった。新鮮なカツオが食せるとあって評判を呼び訪れる人も徐々に増加している。アクアスロンなどのイベントや青年部主催の「びんび市」の会場にもなる。訪問者の増加により、新鮮な魚をお土産にと買い求めてもらえることで消費

拡大にも大きく貢献している。そして、労働予備軍である地元の元漁師さんにも体験事業の講師として再び活躍する場ができた。女性部員の働く場もできたのだ。この事業を通して地域づくり人づくりもできた。この地域は何も無い所だと思っていた。しかし、わが町を訪れて下さる方に喜んでいただけることで私達もまた、この土地に生きる喜びを感じるようになった。

7. 今後の課題や計画と問題点

立ち上げから4年が経過しようとしている。女性部の魚食普及活動から始まり、地域資源を活かした都市と漁村の交流事業として発展し、立派な体験施設も整った。

しかし、まだまだ解決すべき多くの問題が残されている。まず組織の見直し。そして、収支の伴う事業となったことでの賃金体系、施設の維持管理費等。また現在は任意団体として事業展開しているが、社会的動機上、一経営体としての法人化も望まれる。そして今は体験のみの通過型である。大人数を収容できる宿泊施設の無い事が一因とされる。少しでも長く滞在してもらえるようにと漁業体験の導入による検討もされるなか、民宿許可取得のための研修会も始まった。タタキづくり体験のみならず、喫茶部の採算独立のため、一般客やお遍路さんの団体客の誘致、新規開拓も必要である。また、タタキづくり体験の開催されない12月から2月の時期の利用法や各種イベント等、巾広くこの施設を活用し、佐賀町活性化のためそして県内外への情報発信の本拠地として女性部一丸となって更に頑張っていきたい。

平成17年度も既に約2,000名のご予約を受けている。

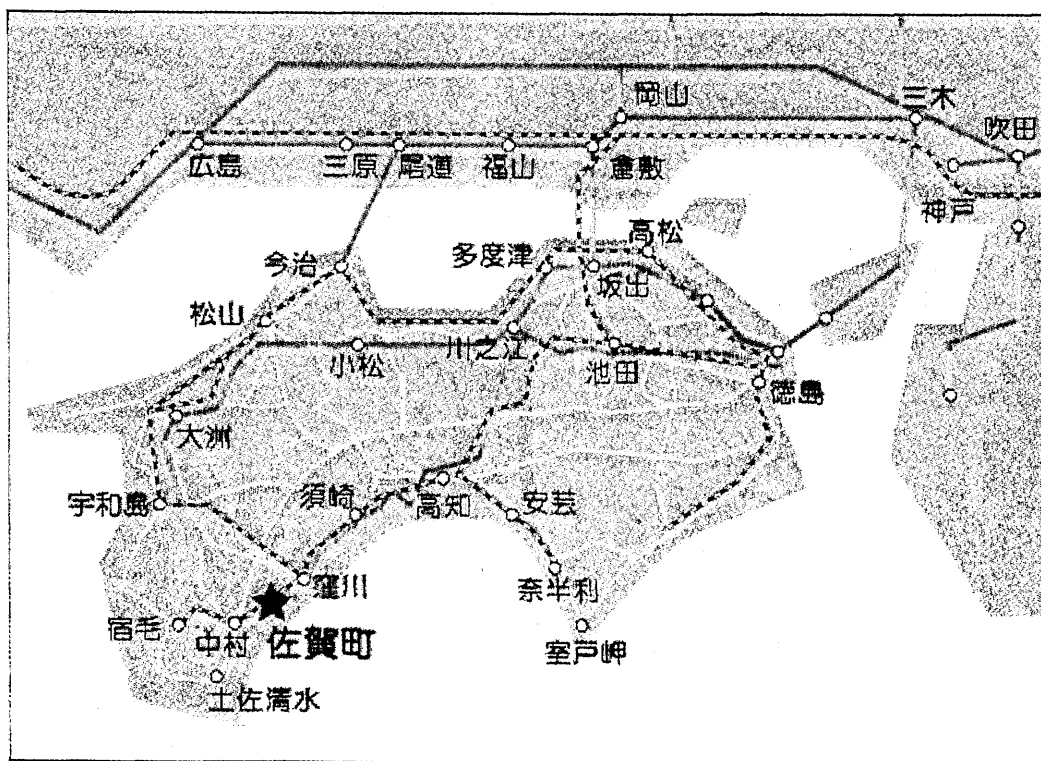


図1 佐賀町の位置図



図2 「黒潮一番館」と港の風景



図3-1 体験学習

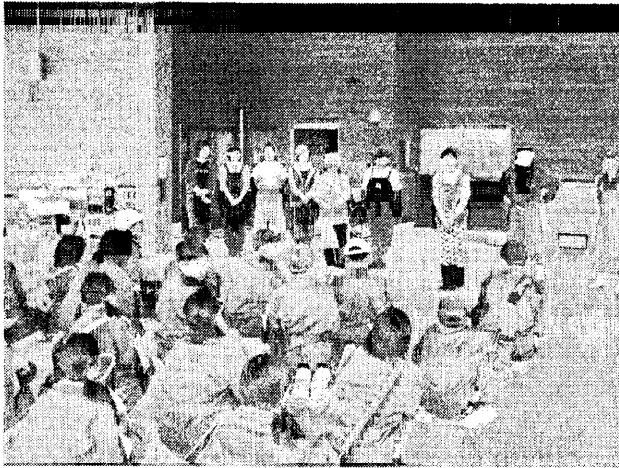


図3-2 体験学習



図3-3 体験学習



図3-4 体験学習



図3-5 体験学習



图 3-6 体验学习



图 3-7 体验学习



图 3-8 体验学习

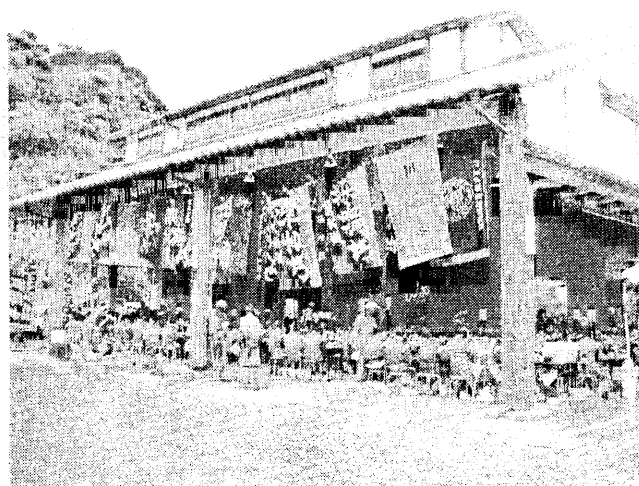


图 3-9 体验学习

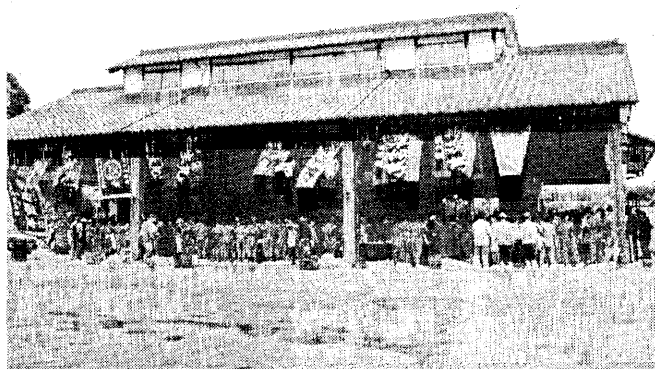


图 3-10 体验学习



图 3-11 体验学习



図4 カツオのわら焼きタタキ

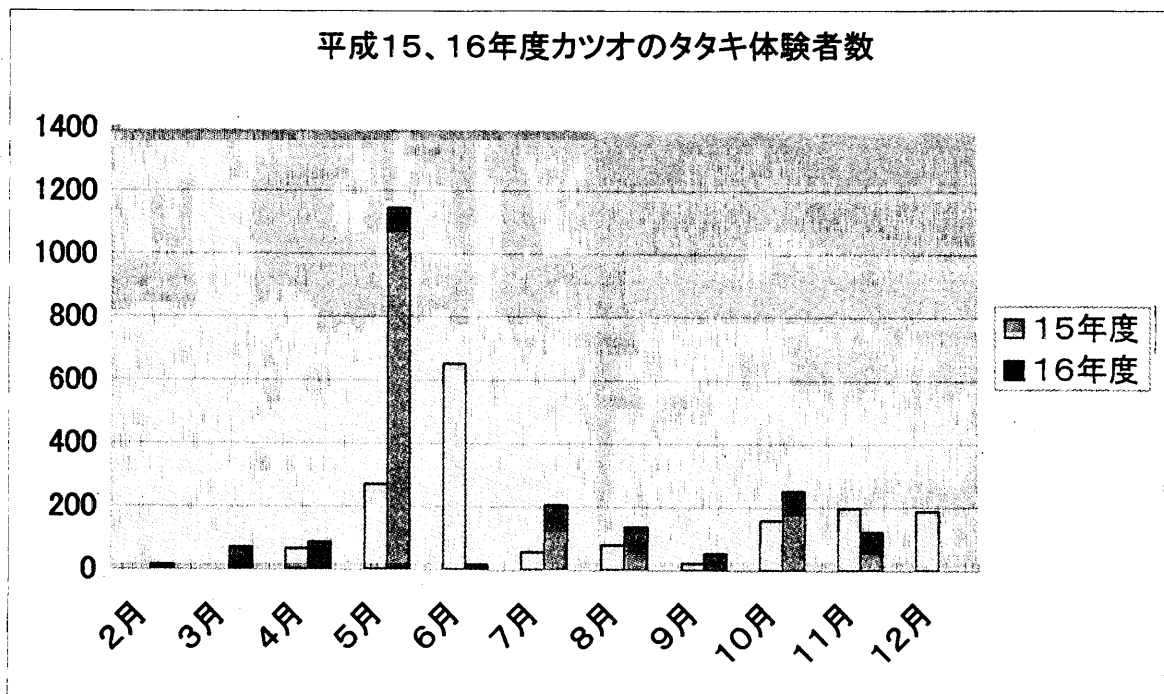


図 5

15年度 1,687人
16年度 2,097人

言葉の花束

佐賀町（鯉たたき体験）の皆様へ

四国に咲かそう 笑顔の花

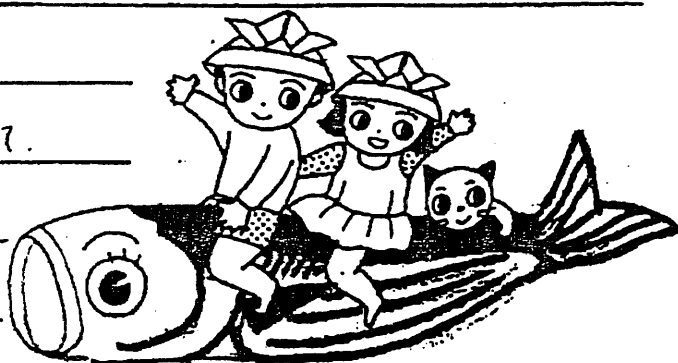
この間の修学旅行では 何人のわすかひ時間だったけど いろいろとお世話になりました。ありがとうございました。鯉たたき体験ができて本当に良かったです。貴重な体験とすばらしい香ばしい肴。食べている鯉は全然ちがって、とてもおいしかったです。佐賀町の人は おだやかな感じで、やさしくて、何かあたためてくれた。最後のお礼のあいさつで佐賀町の人のお話で「すばらしい中学生生活を、すばらしい人生を…」と語るのを聞いて、ふと考えてくれる人たちがいるんだなあと思い、幸せに感じました。ありがとうございました。佐賀町の人々のおかげで、とても心に残る思い出になりました。僕には宝物になります。本当にありがとうございました。心から感謝します。

これからも体に気をつけて、

長生きして頑張って

下さい。またいつか

行きたいと思います。



神戸市立本山南中学校

3年 / 組 15番

氏名： 栄 康佐

図 6

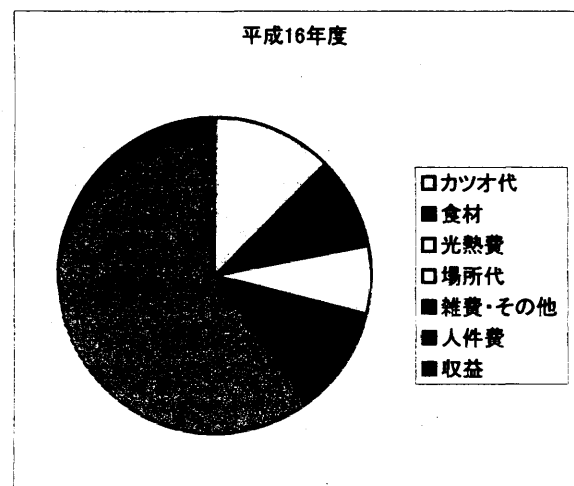
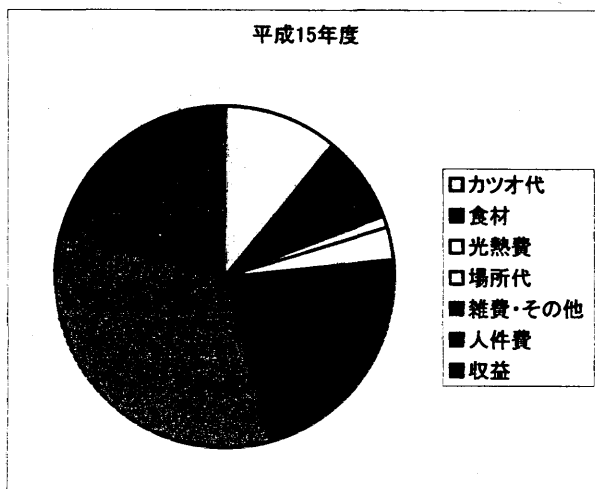
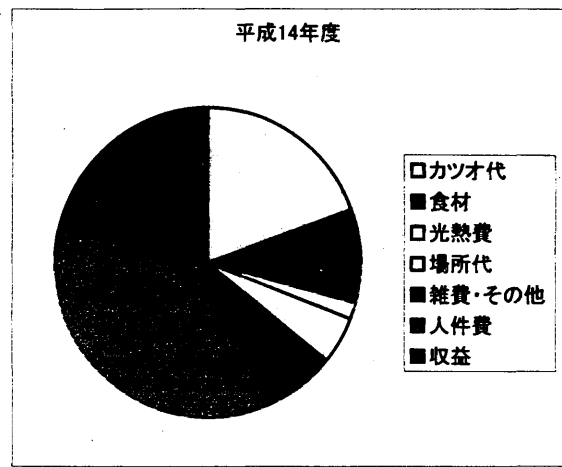
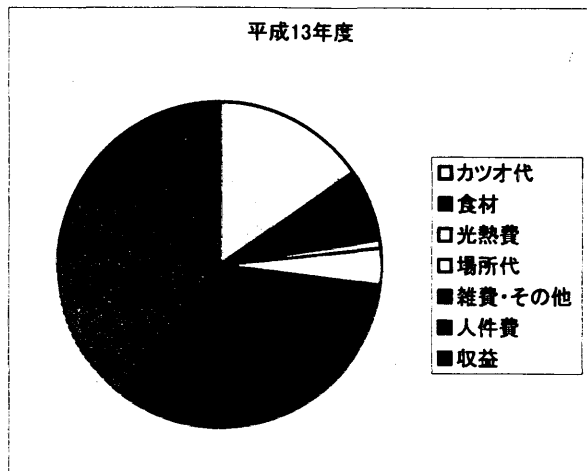


図7 全体にしめる経費内訳

- ・ 15年度は施設の完成により備品（冷蔵庫、テレビ、洗濯機他）の購入を「雑費・その他」で支出
- ・ 施設の完成により16年度は場所代の支出なし
- ・ 16年度に人件費の支出が増加 … 今まで個人の持ち出し等で頑張ってくれた部員に感謝の気持ちを還元